様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　８月２８日現在

機関番号：２４６０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５３０５６０
研究課題名（和文）　平城遷都１３００年祭の社会的せめぎあいとポリティクス

研究課題名（英文）　Social Contestations and Politics in the 1300th anniversary events of Nara Heijo-kyo Capital

研究代表者
遠藤　英樹（ENDO Hideki）
奈良県立大学・地域創造学部・教授
研究者番号：00275348

研究成果の概要（和文）：本研究では、平城遷都 1300 年祭をめぐる国内外や奈良県地域内における、社会的せめぎあいとそのポリティクスをとらえつつ、そこに内在する社会的・文化的・政治的・経済的位相を明らかにした。特に、(1)アジアとの関連からとらえられた「日本」、(2)〈奈良〉に対する観光のまなざし、(3)キャラ化する地域という、3 つの社会学的プロブレマティークに注目し、考察を展開した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I discussed social contestations and politics in the 1300th anniversary events of Nara Heijo-kyo Capital, and cleared social, cultural, political and economic dimensions in this events. I focused especially on three sociological problems. The problems are (1) ‘“Japan” in relation with Asia’, (2) ‘Tourist gazes for “Nara”’, (3) ‘Local mascot character vitalizing community’.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：せめぎあい、ポリティクス、観光、地域

１．研究開始当初の背景

平城京へ遷都してから、2010（平成 22）年で 1300 年であった。これを記念して、奈良県は平城遷都 1300 年祭を実施した。これは、奈良県内外の実に多くの人びとを巻き込みつつ展開されたイベントであり、これを考察することが、地域や観光のかたちについて研究を深めていくうえで必要不可欠であると考えられた。

２．研究の目的

本研究の目的は、平城遷都 1300 年祭をめぐる国内外や奈良県地域内における、社会的せめぎあいとそのポリティクスをとらえつつ、そこに内在する社会的・文化的・政治的・

経済的位相を明らかにすることにあった。

３．研究の方法

本研究では、「平城遷都 1300 年祭の社会的せめぎあいとポリティクス」について、多様な研究方法を組みあわせながら複眼的にアプローチした。具体的には、文献研究、各種資料の分析、インタビューをはじめとする定性的調査、質問紙調査データを用いる定量的調査の研究方法を用いた。インタビューについては、奈良県内の多様な社会的ポジションにいる人びとを選択して実施した。質問紙調査については、観光客を対象とする調査を行なった。

(1)2010（平成 22）年度前半では、研究期間内において特に注目したいと考えられる平城遷都 1300 年祭に内在する社会学的なプロブレマティーク（アジアとの関連でとらえられた「日本（ナショナルなもの)」、〈奈良〉に対するまなざし、キャラ化する地域）について文献研究を行った。まず、本研究テーマと関連する社会学的な先行研究をシステマティックに探索し、再度考察を加えた。また、奈良における観光・まちづくりと平城遷都 1300 年祭に関わる行政書類、書籍、パンフレット類、観光情報誌類、新聞や雑誌の記事類をはじめ、できる限り多くの資料を収集し分析を行った。以上の作業と併行し、この事業に関わっている奈良県内の多様な社会的ポジションにいる人びとを対象にインタビューを実施した。さらに 2010（平成 22）年度後半においては、各会場で観光客を対象に質問紙調査を実施した。その中で、観光客が平城遷都 1300 年祭でどのような行動を行っているのか、またどのように感じているのか等、観光客の行動と意識に関する調査を行うとともに、奈良に対するイメージ調査も取り入れた。

(2)2011（平成 23）年度前半では、平城遷都 1300 年祭に関わる人びとを対象にインタビューを継続し行った。この事業に関わった奈良県内の多様な社会的ポジションにいる人びとを対象にインタビューを実施しながら、この事業を経ることで、相互の関係性の構造がどのように形を変えていきつつあるのかを明らかにした。市民グループ、産業界、行政、寺社など、地域における多様なポジションの人びとは、様々な星々が集まりせめぎ合いながら夜空に一つの星座をかたどるように、相互の利害関心がせめぎあい「欲望の星座」ともいえる地域空間をかたどっている。平城遷都 1300 年祭がこの「欲望の星座」をどのように動かしていくのか。それによって、地域には新たにどのようなポリティクスが生まれるのかを考えた。さらに 2011（平成 23）年度後半において、奈良観光客を対象に質問紙調査を実施した。その中で、観光客が奈良をどのように眼差すようになっているのかを考察した。

(3)2012（平成 24）年度では、これら文献研究や資料分析、インタビュー調査、質問紙調査の研究方法による結果をより充分に補完させていく作業を行った。

４．研究成果

本研究は研究期間内に特に 3 つのプロブレマティークに注目し考察した。それは以下のものである。

(1)アジアとの関連からとらえられた「日本」

平城遷都 1300 年記念事業協会が発行する『平城遷都 1300 年祭・実施基本計画』を見ると、事業目的として、「平城遷都 1300 年を機に、日本の歴史・文化が連綿と続いたことを“祝い、感謝する”とともに、“日本のはじまり奈良”を素材に、過去・現在・未来の日本を“考える”」と書かれている。このことからも分かるように、この事業では、ナショナルなものとしての「日本」を再構築・再発見しようとしている。ここで重要なことは、「連綿と続いた」ような日本の歴史・文化がフィクションに過ぎないことを指摘することではない。そうではなく、たとえ仮構のものではあっても、「連綿と続いた」ような、ある種の日本の歴史・文化を、この事業を通して措定しようとしていることである。ナショナルなものを発動させ、再生産・再流通させていくことで、現実化していこうとする諸力が形成されていく社会的なプロセスを問うことこそが、ここでは重要なのである。奈良県は、「国のはじまり」としてつねにナショナルなものの再構築・再発見に利用されてきた。金子淳が『博覧会の政治学』（青弓社）で、1940（昭和 15）年において計画された「紀元（皇紀）二千六百年記念事業」との関連でこれについて指摘しているが、平城遷都 1300 年祭においてはアジアとの関連にアクセントが置かれ、そこからナショナルなものを仮構しようとしている点が現代の文脈で特に考察すべき点であることを指摘した。

(2)〈奈良〉に対する観光のまなざし

J. アーリが『観光のまなざし』（法政大学出版局）で述べているように、地域を見つめるうえで「まなざし」の介在は不可欠である。〈奈良〉に対する「まなざし」として、これまで〈大和路〉という風景のとらえ方が発明されてきた。これは一人の人物が発明したものではなく、多様な社会的諸関係のもとで時

代をかけて構築・発明されてきたものであるが、その際、奈良の風景をずっと撮り続けてきた写真家・入江泰吉の役割は大きい。入江が奈良の風景にレンズを向けるようになったのは、1945（昭和 20）年大阪大空襲で奈良に引き揚げてきたとき以来である。とくに亀井勝一郎『大和古寺風物詩』をむさぼるように読んだことをきっかけに、彼の奈良の風景をとらえる視線は大きな変化を遂げた。時がとまったままの“滅びの美”として奈良をとらえ、そこに「魂の再生」と「日本という国土の再生」を二重写しにしていく、奈良の風景のとらえ方は、日本浪曼派である亀井勝一郎『大和古寺風物詩』と軌を一にしたものである。まさに「遅れてきた日本浪曼派」として入江は、奈良の風景に対する認識を一変させたのである。このような「認識論的切断」なくして、〈大和路〉という風景は発見されなかった。ここから入江は、東大寺の塔頭「観音院」の住職・上司海雲を介して高畑サロンと呼ばれた文人たちのネットワーク、そしてその中心にいた志賀直哉と親交を結び、亀井勝一郎、志賀直哉、小林秀雄といった人びとと交流しながら〈大和路〉という風景のとらえ方に内在している、「まなざしの根拠」を探索する作業を行いはじめる。そうして次第に〈大和路〉という風景のとらえ方は、我々の前に自然のように現れるイデオロギー、あるいはイデオロギー的実践となっていく。この風景のとらえ方が今、平城遷都 1300 年祭によって、ある種の変容を迫られている。では、どのように変容を遂げていくのか。これを本研究では考察した。

(3)キャラ化する地域

相原博之『キャラ化するニッポン』（講談社現代新書）では、仮構的な「キャラ」を設定することが現代日本社会の大きな特徴として挙げられているが、地域社会において、これが形象化されたものが「ご当地キャラクター」であろう。地域づくりを展開する際には、全国いたるところで、このような「ご当地キャラクター」が造られている。平城遷都 1300 年祭では、「せんとくん」がその代表である。この「せんとくん」に反発しつつ、市民グループからは「まんとくん」が、寺社グループからは「なーむくん」が造られるにいたり、今、奈良県はこうした「ご当地キャラクター」で溢れかえっている。上の問題点と絡ませながら、地域づくりにおける「キャラ」のあり方を再考することで、これまでの社会学的な分析にはない視点を導出しようとした。

以上のプロブレマティークは、せめぎあう社会関係のなかでたちあがるものであると言える。それは、国（中央）と奈良県（地方）のせめぎあい、奈良県内部の地域と地域のせめぎあい、行政、市民、産業界、寺社などによる錯綜する利害関心間のせめぎあい等である。

たとえば市民、産業界、寺社、行政等は同じ方向を向いているとは限らない。地域において、それぞれの利害関心を持ちながら相互に微妙なズレを含み持ったまま、平城遷都 1300 年祭という同じ事業に関与し合っていた。しかも例えば、同じ産業界同士であっても決して一枚岩ではなかった。ホテルや旅館、交通業、旅行代理店などの観光関連産業とその他の産業界は、同じ利害関心を持っている部分と異なる部分を両方持ち合わせていた。同じ観光関連産業もそうだ。たとえ同じホテル業であっても、立地条件や経営方針、歴史などによって一枚岩であるわけではなかったのである。

このことは市民グループにも当てはまる。「平城宮跡事業」で夏に実施された「光と灯りのフェア」は、奈良市で毎年行なわれているイベント「なら燈花会（とうかえ）」を基にしたものであった。「なら燈花会」は、奈良市で毎年８月初旬から中旬にかけて行なわれているもので、夏の夜に奈良の街並みをろうそくの灯りで照らしだすという「光と闇のイベント」である。このイベントが行なわれるようになったのは、1999（平成 11）年からのことで、現在は NPO「なら燈花会の会」で運営されている。この団体の新旧メンバーが積極的に関与しながら「光と灯りのフェア」が実施される際に、奈良県内に存在する地域づくりに関連する他の市民 NPO グループのメンバーすべてがこれに積極的に協力するとは言えなかった。メンバーが相互に重なりながらも、利害関心が微妙にズレており、せめぎあっていたのである。

こうした、輻輳するせめぎあいの産物、社会的交渉（ポリティクス）の産物として、平城遷都 1300 年祭をとらえ、そこに内在する社会的・文化的・政治的・経済的位相を明らかにすることができた。博覧会のあり方を社会学の分野において考察するうえでも、また地域や観光のあり方を社会学的に考察する際にも、貢献できる研究となったのではないかと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

①遠藤英樹、「平城遷都 1300 年祭に関する観光調査・単純集計」、『地域創造学研究』（奈良県立大学研究季報）、査読無、第 21 巻(4)、2011、pp. 113-127

〔学会発表〕（計　２件）
①遠藤英樹、「文化論的転回（Cultural Turn）から観光論的転回（Touristic Turn）へ――観光を軸とした社会的想像力」、観光学術学会、2012 年 7 月 8 日、和歌山大学

②遠藤英樹、「社会的イデオロギーとしての風景――〈大和路〉という風景の生産」、日本社会学会、2012 年 11 月 3 日、札幌学院大学

〔図書〕（計　２件）
①遠藤英樹・堀野正人編著、『観光社会学のアクチュアリティ』、晃洋書房、2010、220

②安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟、『よくわかる　観光社会学』、ミネルヴァ書房、2011、212

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
遠藤　英樹（HIDEKI ENDO）
奈良県立大学・地域創造学・教授
研究者番号：00275348

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：